



Data

監督: ガウリ・シンデー

出演: シュリデヴィ/アディル・フ
 セイン/メーディ・ネブー/
 アミターブ・パッチャン/ブ
 リヤ・アーナンド/スラバ
 ー・デーシュバーンデー/ナ
 ヴィカー・コーティヤー/シ
 ヴァンシュ・コーティヤー/
 スジャーター・クマル/ニ
 ールー・ソーディー/ロス・
 ネイサン/コーリー・ヒップ
 ス/ダミアン・トンプソン

👁️👁️ みどころ

歌なし、踊りなしのハリウッド映画の名作『めぐり逢わせのお弁当』（13年）に続いて、歌と踊りを必要最小限にとどめたハリウッド映画の名作が登場！脚本良し、美人女優良しのハートフルかつ前向きな本作に、インドはもちろん世界中の主婦たちの共感が・・・。

妻として、母としての義務は多いが、それを果たしてばかりでは女の魅力は徐々に減殺、いつの間にか厚かましきだけがとりえの大阪のおばちゃん状態に……。それも悪くはないが、英会話が苦手なら習わなくっちゃ！一人旅が苦手ならチャレンジしなくちゃ！

そんな前向きの生き方から生まれた本作ラストの名スピーチは、『チャップリンの独裁者』（40年）や『英国王のスピーチ』（10年）とも肩を並べる感動を……。

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

■□■長編監督デビュー作が大ヒット！この女性監督に注目！■□■

去る7月9日に観た『めぐり逢わせのお弁当』（13年）は、ロバート・レッドフォード主宰のサンダンス・インスティテュートで学び、ムンバイ出身でニューヨークに拠点を持ったリテーシュ・バトラ監督の長編デビュー作で、歌なし踊りなし、という珍しい「ハリウッド映画」だった。しかして、本作も1974年生まれ若手女性監督ガウリ・シンデーの長編デビュー作だが、本作も大ヒットし、ガウリ・シンデーは「2013年1月20日に開催された“フィルムフェア賞”にて最優秀新人監督賞を受賞」とともに、「2012年成功したハリウッド監督のベスト5」にも選ばれたそう。本作は脚本も彼女が書

いているが、それはいわゆる「私小説」に近いもの。ブネーでピクルスを売っていて、英会話が苦手だった母親のことをイメージして書いたらしい。

しかして、本作のヒロイン、シャシ（シュリデヴィ）は料理自慢の「一般的な主婦」という設定だが、それには山田洋次監督の『小さいうち』（14年）（『シネマルーム32』161頁参照）を観た時と同じように少し違和感がある。シャシの夫のサティシュ（アデル・フセイン）は忙しいビジネスマンだが、長女のサブナ（ナヴィカー・コーティヤー）と長男のサガル（シヴァンシュ・コーティヤー）に優しそうないい父親だ。サティシュの母親（スラバー・デーシュパーンデー）も同居し5人暮らしをしているから、シャシは朝から家族の朝食作りに大忙し。ところが、シャシはそれ以上にインドの菓子・ラドゥを訪問販売するというちょっとした「起業家」もやっているから、料理の腕は相当なものらしい。インドの住宅事情はわからないが、家の広さを見ただけでも『小さなうち』と同様、どちらかという上流、少なくとも中流の上の家庭だと思うのだが……。

それはともかく、ガウリ・シンデーの私小説的脚本は、邦題どおり、姪の結婚式のためにインドからニューヨークに一足先に旅立ったヒロインが、苦手だった英会話に励む中で自信を持ち、新しい女性の生き方を再確認するというわかりやすいストーリーだ。ハリウッド映画は下派手な歌と踊りがトレードマークだが、『めぐり逢わせのお弁当』ではそれは全くなかったし、本作でもそれはほんの少しだけにとどめている。ストーリーの継ぎ目でうまく音楽にのせて次の展開に切り替えていく手法は見事だし、ラストの結婚式のシーンでは歌と踊りを見せてくれた方がハリウッド映画らしくなる。そこらのバランスも絶妙だ。『シネマルーム33』では「新しいスタイルのハリウッド映画2作」というタイトルで『めぐり逢わせのお弁当』とあわせて本作を並べなければ……。



『マダム・イン・ニューヨーク』6月、シネスイッチ銀座ほか全国順次公開
配給：彩プロ・Eros International Ltd.

■50歳とは思えぬ、インドの美人女優に注目！■

『めぐり逢わせのお弁当』でも、弁当を作るインド人女優ニムラト・カウルの美貌が目についたが、本作でもまずヒロインのシャシを演じるインド人女優シュリデヴィの美人ぶりが目につく。シュリデヴィは「インド圏最大のテレビ局である『CNN-IBN』が2012年に実施した“インド映画史100周年・国民投票”で女優部門の“ベスト1”を見事獲得した女優だから、その美貌には納得だが、1997年に結婚して休業。本作で



『マダム・イン・ニューヨーク』6月、シネスイッチ銀座ほか全国順次公開
配給：彩プロ・Eros International Ltd.

15年ぶりに女優復帰したのは、ガウリ・シンデー監督の脚本と偶然めぐり会った彼女が「シャシを演じたい！」と申し出たためらしい。

シャシがニューヨークで生活している姉マヌ（スジャーター・クマール）

の長女ミーラ（ニール

ー・ソーディー）の結婚式に出席するため、一足先に1人でインドからニューヨークに旅立つまでが本作の導入部。そこで描かれる、ラドゥを訪問販売する小さな起業家としてのシャシは、自信たっぷりで楽しそう。しかし、サティシュの妻としてのシャシ、サブナとサガルの母としてのシャシはそれなりに義務を果たしてはいるものの、1人だけ「英語がしゃべれない」というコンプレックスのため、落ち込み気味。インドでは年頃の娘の学校の先生との進路相談も英語でやらなければならないようだから、英語の苦手なシャシが英語ペラペラの父親の代わりに対応すると娘からはブーイングが……。日常会話では、1人だけジャズの発音が悪いと子供たちからバカにされる始末だし、夫もそれを擁護してくれないから、これでは彼女の立場がない。しかして、その権威は……？

インド映画史上、No.1女優シュリデヴィが、15年間のブランクからの復帰第一作として選んだ本作の導入部では、英語コンプレックスのために家庭内で自分の立場を築けない主婦シャシの悩み多き姿を見事に演じている。英語コンプレックスのシャシを、いくら事前に準備することもあるだろうという理由だけで1人先に行かせるというサティシュの決断は少し酷だが、決まってしまったものは仕方ない。私は2000年8月にはじめて1人で日本から中国の大連への飛行機に乗ったが、その時の不安は結構大きかった。ましてや、家庭の主婦で家事しかしていないシャシが、たった1人でインドからニューヨークまでの長旅は大丈夫？

■□■ 4週間で英語が話せる！それってホント？ ■□■

弁護士の仕事をしていると、「4週間で英語が話せる！」のような宣伝文句にはつい詐欺のにおいをかぎ取ってしまうが、ガウリ・シンデー監督はそうではないらしい。ちなみに、プロゴルファーの石川遼は「スピード・ラーニング」のコマーシャルにさかんに登場して



『マダム・イン・ニューヨーク』
6月、シネスイッチ銀座ほか全国順次公開
配給：彩プロ
© Eros International Ltd.



『マダム・イン・ニューヨーク』
6月、シネスイッチ銀座ほか全国順次公開
配給：彩プロ
© Eros International Ltd.

いるが、「そんなものウソだよ」と思いつつやっていたらホントに英語がしゃべれるようになっていたという新聞投書もあったから、これだって信じてやり続ければそれなりの効用があるようだ。しかして、「4週間で英語が話せる！」との宣伝文句に飛びついていったシャシの場合は？

本作（の脚本）が面白いのは、シャシがどうしても英会話をマスターしたいと考えるようになった動機を、多少オーバーながら説得力を持って描いていること。外国人に親切なコーヒーショップなら、言葉がわからない外国人に対してはより丁寧に対応してくれるはず。ところが、結婚する姪ミーラの妹ラーダ（プリヤ・アーナンド）に連れられて大学見学に赴いたシャシが1人で入ったコーヒーショッ

プは最悪。しかし、考えてみれば、それだって原因は自分が英語がしゃべれないためだ。いたたまれなくなってコーヒーショップを飛び出してきたシャシを慰めてくれたのが、後日英会話学校で知り合いになるフランス人青年ローラン（メーディ・ネブー）だったというのも面白い設定だが、とにかく、インドからやってきた2人の子持ちの主婦が、家族到着までの4週間で英会話をマスターしようと決意した動機が説得力を持って描かれていく。

私も北京で1人で地下鉄の切符を買って乗る時は苦勞したが、それはシャシも同じ。まず、シャシは電話で教えられた指示どおりに、地下鉄に乗って学校まで到着することができるのだろうか？ コーヒーショップの口うるさいお婆さんと違って、地下鉄の改札口に立っていたおじさんがえらく親切だったのは、シャシにとってラッキーだったが・・・。

■□■なるほど、これなら！しかし、挫折も・・・■□■

最近ではゲイの映画が多いが、シャシが通い始めた英会話学校のデヴィッド先生（コーリー・ヒップス）もそうらしい。また、シャシがこの学校で仲間になった生徒たちは、前述したフランス人男性のローランの他、スペイン人女性のエヴァ（ルーク・アグラ）、中国人女性のユソン（マリア・ロマノ）等々個性的な連中ばかり。そんな生徒たちを、それぞれのレベルに応じてうまく導いていくデヴィッド先生の、しゃべりをメインとした授業はかなりユニークだ。私の中国語の勉強法は、1人でラジオやICレコーダを聞き、とにかく鉛筆で紙に書いて覚えていくというものだから、読むことはできてもしゃべれない傾向が強い。しかし、シャシの通うデヴィッド先生の学校はとにかくしゃべり中心で楽しそうだから、毎日ここに通い、4週間も経てばなるほど、これなら！

もっとも、シャシにとって計算外だったのは、予定を前倒してサティシュと2人の子供たちがニューヨークにやってきたこと。これは1人でニューヨークで暮らすシャシを心配してのことだが、今やニューヨークでの英会話学校通いが楽しくて仕方ないシャシにとっては、かえって迷惑な話。現に、家族でニューヨーク見学をしていると学校に行けなくなったシャシは、「疲れた」を理由にエンパイア・ステートビルの見学を1人だけパスして学校に出かけたが、その間にサガルがケガをするアクシデントが起きたから大変。ケガは大したことはなかったが、なぜシャシがみんなと同じ行動をとらず1人だけ別行動をとっていたのが問題とされ、シャシは苦境に陥るとともに、母として、妻としての義務を果たせていなかった、と自分自身を責めることに。

しかし、母として、妻としての義務を果たすためには、英会話を習うことすら許されないの？声高には叫ばないものの、本作にはガウリ・シンデー監督のそんな切実な問題提起が！



『マダム・イン・ニューヨーク』6月、シネスイッチ銀座ほか全国順次公開
配給：彩プロ・Eros International Ltd.

■□■卒業試験は結婚式の当日！これでは受験はムリ？■□■

本作はシャシの家族も多いし、デヴィッド先生の英会話学校の生徒も数多く登場するが、みんな個性が豊かだから覚えやすい。デヴィッド先生が生徒たちに課した卒業試験は、5分間スピーチ。それを聞いて理解できれば、「あなたの英語での会話能力を認める」という

ユニークな（いい加減な？）ものだ。シャシがデヴィッド先生の学校に通っているのを知っているのは、ラーダだけ。遅れてインドからやってきた夫にも子供たちにも何も言わないままシャシは頑張っていたが、サガルの事故後は学校を休み、かつ卒業試験が結婚式とダブったこともあってシャシは一旦は卒業試験を諦めたが、さて・・・。



『マダム・イン・ニューヨーク』
6月、シネスイッチ銀座ほか全国順次公開
配給：彩プロ
© Eros International Ltd.

本作では、ヒロインのシャシ

を演ずるシュリデヴィの、前向きになったり、ポシヤったりの感情の起伏がうまく表現されている。それに加えて、フランス人男性ローランから女としての美しさや魅力を認められ、それを口で表現してもらうことの嬉しさと戸惑いの両面もうまく表現されている。結婚式は午後からだから、午前中のわずかの時間で終わる卒業試験は受験可能。そう説得するラーダやローランの声に押されてシャシは再び学校に通っていたが、結婚式当日の午前中は、お土産として大量に提供するラドゥ作りの大役がシャシに。結婚式当日、朝早くからそれを作りあげ、さあこれから卒業試験に向かおうとしたが、ちょっとしたはずみで大皿に乗せていたラドゥがすべて地上に落ちてしまったから大変だ。こうなれば、市販のものでごまかすわけにはいかないから、再度作り直すしかない。したがって、卒業試験はさっぱり諦める。シャシはそう決意し、再びラドゥ作りに精を出したが・・・。

■□■クライマックスのスピーチには、思わず涙が・・・■□■

『チャップリンの独裁者』（40年）が日本で公開されたのは1960年だが、製作・発表されたのは1940年。既に1939年9月1日にはナチスドイツによるポーランド侵攻が開始されていた。また、同年9月に「日独伊三国同盟」を締結していた日本は、1941年12月8日の真珠湾攻撃によって、アメリカとの戦争に入っていた。そんな時期に同作が日本で公開できるはずがないのは当然だが、同作のハイライトは「ハンナ、聞こえるかい」で始まる大演説。「兵士諸君、君たちは野獣のような奴らの犠牲になってはいけ

ない・・・・・・・・。彼らは機械のような頭と心をもつ機械人間なのです」「兵士諸君、自由のために戦いなさい・・・・・・・・。さあ、民主主義の名の下に私たちはその力を使いましょう」と訴えかけるヒンケルそっくりの床屋おやじの演説は、まさにチャップリンその人の心の声だった。

クライマックスを名スピーチで終える近時の名作は、2011年の第83回アカデミー賞で最多12部門にノミネートされ、作品賞、主演男優賞、監督賞、脚本賞を受賞した『英国王のスピーチ』（10年）。同作のラストは、吃音（どもり）で苦しんでいた英国王ジョージ5世がそれを克服し、「戦争スピーチ第1号」として歴史に残る名演説を行うシーンだ（『シネマルーム26』10頁参照）。

この2つに比べると、本作ラストのクライマックスの結婚式で展開されるシャシのスピーチは世界の歴史に残るものではないが、映画を観ている人の心には十



『マダム・イン・ニューヨーク』 6月、シネスイッチ銀座ほか全国順次公開
配給：彩プロ・Eros International Ltd.

分響くもの。ラーダからスピーチを求められたシャシが戸惑っていると、側に座っていた夫サティシュが「妻は英語が苦手なものですから、私が代わりに・・・」としゃべり始めたが、意外にもシャシはそれを阻止。そして、自ら立ち上がり、スローな語り口ながら、誰でも十分聞き取れる英語で心温まるスピーチを・・・。これには側に座っていたサティシュがビックリなら、卒業試験を終えて結婚式にかけつけてきたデヴィッド先生やクラスメイトたちもビックリ！約5分にわたる名スピーチがやんやんやの大喝采を浴びたのは当然だが、嬉しいことにそれを聞いたデヴィッド先生は、「冠詞の使い方等に多少のミスはあったが、十分聞き取れる5分間スピーチだったので、卒業試験合格の免状を与える」と宣言！

『チャップリンの独裁者』の大演説も、『英国王のスピーチ』のスピーチも良かったが、まさにガウリ・シンデー監督の私小説的な脚本にもとづく、インドの美人女優シュリデヴィが、結婚式の姪に捧げた名スピーチもグッド。その中に含まれた心のこもった温かさ、英語としての組み立て方に、思わず涙が・・・。

2014（平成26）年8月5日記